

2012年1月6日

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 人間科学研究科
申請者氏名 小林 仁美
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目 摂食障害の治療中断に関連する要因の検討
**The factors related to drop-out from treatment in patients
with eating disorders**
論文審査員 主査 早稲田大学教授 野村 忍 博士（医学）（東京大学）
副査 早稲田大学教授 熊野 宏昭 博士（医学）（東京大学）
副査 早稲田大学教授 嶋田 洋徳 博士（人間科学）（早稲田大学）

摂食障害（Eating Disorders: ED）は、神経性食欲不振症（Anorexia Nervosa: AN）と神経性大食症（Bulimia Nervosa: BN）および特定不能の摂食障害（Eating Disorders not otherwise specified: ED-NOS）に分類されている。ANは、若い女性に好発し、やせ願望により極端なダイエットを続け低体重、低栄養状態になる病態である。BNは、過食あるいは排出行動を繰り返す病態である。多くの患者において、ANからBNへ移行することが知られており、両者は共通する病態と考えられている。ED-NOSは、いずれの診断基準も満たさない食行動異常である。摂食障害患者は、病識のなさ、強固なやせ願望、強迫的なダイエットなどの食行動異常および対人葛藤を抱えていることが多く、臨床的に治療困難をきたすことが知られている。特に、専門医療機関における治療継続が困難なケースが多い。本論文は、摂食障害患者における治療中断の特徴を捉え、治療行動の促進に寄与する心理的要因を明らかにするために行われた研究である。

第1章では、ED患者の治療中断をめぐるこれまでの研究動向について概観した。ED患者において、近年慢性化・重症化傾向が指摘されているために早期治療の重要性がより強調されている。しかしながら、患者の治療動機が低いために治療中断が生じやすいことが指摘されている。そのため、患者の治療動機を向上させ、治療行動を促進するための介入が行われるようになってきている。

第2章ではこれまでの研究における問題点として、①治療中断についての定義が研究者によって異なるために、ED患者における治療中断の特徴や関連する背景要因について明確にされていないこと、②治療行動の促進を目的とした介入において、介入のターゲットとなる認知的要因の基礎的知見が不足していること、③患者が有する治療に関する困難点の

検討が十分になされておらず、治療の促進を目的とした介入の妥当性が検討されていないこと、の3点について指摘した。これらの問題点を踏まえ、①EDの治療中断の特徴を明らかにし、関連する背景要因を検討する、②ED患者の治療に関連する認知的要因の特徴と治療中断との関連性を検討する、③ED患者が有する治療困難感を明らかにすることにより、治療中断を予防し、治療行動の促進に寄与する心理的ターゲットを明らかにするための基礎的な知見の提供を行う、ことの3点を本研究の目的とした。

第3章では、ED患者の治療中断及び治療中断に関連する背景要因について検討を行った。研究1では、治療中断後に再び受診に至った再受診患者16名の特徴について初診患者57名と比較検討を行った。再受診患者群では全例がAN-BP（むちゃ食い・排出型）もしくはBNであり、過食行動を伴う病型であった。また、再受診患者では初診患者よりも罹病期間が有意に長く、Body Mass Index (BMI)が低い傾向が見られた。さらに、無力感や抑うつ症状、精神的不健康に関する得点が高いことも明らかにされた。再受診患者におけるこれらの特徴から、治療中断により症状の増悪があった可能性について論じた。研究2では、ED患者の治療中断がどのように生じているのか詳細に検討を行った上で本研究における治療中断についての定義を行い、治療中断の背景要因について患者、治療提供者側の要因を含めた検討を行った。初診患者166名を対象として、初診から1年以内の治療継続日数を従属変数とした生存分析の結果、約1割の患者が1回の治療で治療中断しており、約4割の患者が1年以内に治療中断していた。また、治療中断の生じる時期によってそれぞれの患者群が異なる特徴を持つことを明らかにした。これらの結果に基づき、本研究では初診後180日以内に生じるより早期の患者の自己判断による中断を治療中断と定義し、治療のより早期に生じる治療中断について検討を行った。その結果、治療中断に関連する背景要因として、外来治療のみを受けていること、全体的なQuality of Lifeが高いこと、年齢が低いこと、発症年齢が低いこと、Body Mass Indexが17.5以上であること、神経性大食症であること、状態不安が低いことが挙げられた。

第4章では、近年ED患者に対するMotivational Interview (MI) で用いられている治療に関連する認知的要因について、治療中断との関連性を検討した。研究3では、治療に関連する認知的要因として「治療に対する重要性」、「治療に対するセルフエフィカシー」に着目し、ED初診患者93名についてこれらの認知的要因の特徴について検討を行った。研究4では、初診患者76名を対象として、治療に関連する認知的要因と治療中断との関連性について検討を行った。その結果、治療に関連する認知的要因と治療中断との関連性は見られなかった。

第5章では、ED患者の治療初期において患者が有する治療行動の阻害要因を明らかにし、治療に関連する認知的要因との関連性について検討を行った。研究5では、ED患者6名を対象として、半構造化面接により治療行動の阻害要因に関する項目の抽出を行い、26項目

からなる質問紙を作成した。次いで、ED患者56名を対象として、質問紙調査を実施し、因子分析により、「無力感」、「回避的態度」、「治療意欲の欠如」、「世間体の悪さ」の4因子10項目が抽出された。このうち、「治療意欲の欠如」は並行検査を行った治療に関連する認知的要因（治療に対する重要性および治療に対するエフィカシー）との間に有意な負の相関が認められた。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は以下のとおりである。

[1] 小林仁美・石川俊男・野村忍：摂食障害における Quality of Life に関連する要因の包括的検討、女性心身医学、Vol.15, No.1, pp.144-153 (2010)

[2] 小林仁美・石川俊男・野村忍：摂食障害の治療初期における患者が有する治療に対する抵抗感の検討、女性心身医学、Vol.16, No.2, pp.146-152 (2011)

本研究は、摂食障害患者の治療中断に関する要因を多数の臨床群を対象として検討したものである。摂食患者においては、治療中断がED症状に負の影響を及ぼす可能性があること、治療中断の要因として治療形態、QOLが関連することが示唆された。初診時の認知的要因については治療中断との明確な関連は認められなかったものの、治療行動の阻害要因と負の相関が認められた。本研究は、治療継続が難しい摂食障害患者における要因を詳細に検討し、ED患者に対する適切な治療介入につなげてゆく基礎的な知見を提供した優れた研究であると考えられる。

以上の結果より、本審査委員会は、小林仁美氏の学位申請論文「摂食障害の治療中断に関連する要因の検討」は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上